



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第28主日 C年 (2022年10月9日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記下 5章14—17節

第二朗読：テモテへの手紙二 2章8—13節

福音朗読：ルカによる福音書 17章11—19節

イエスさまと始まる新しい賛美

第一朗読では、癒されたナアマンからエリシャが贈り物を受け取らなかった点に注目してください。エリシャは呪術的な仕方（じゆじゆつてきしかた）でナアマンを清めませんでした。言葉で指示（じし）を与えただけで清めたのです。つまり、エリシャは自分の力には頼らず、神さまの言葉を信頼（しんらい）して、神さまの言葉の力強さを強調したのです。朗読の冒頭（ぼうとう）に「ナアマンは神の人の言葉どおりに」（14節）とあります。ナアマン自身が神さまの言葉（たよ）に頼った時に、癒されたのです。

そして、贈り物の代わりにナアマンは17節で「土」を運び出します。これは印象的な一節だと思います。つまり、ナアマンは神さまがイスラエルの神さまだとしたら、イスラエルの地でのみふさわしい礼拝（かろう）が可能（かんのう）であると考えたのではないのでしょうか。それで土を運べるだけ運んでアラム（シリア）に帰（かえ）った後も、それで祭壇（あと）を築（きず）いて神さまにふさわしい礼拝（かろう）をしようとしたのでしょうか。古代の世界では土地と礼拝（かた）は固く結びついていました。他の土地に行ったら、そこの神々を礼拝するのが当たり前だったのです。主なる神さまへの礼拝（かた）は、イスラエルの土地においてのみ正しく礼拝されると考えられていたのです。ですから、ナアマンは土（はこ）を運んだのです。

第二朗読では冒頭の「イエス・キリストのことを思い起こしなさい」を心に留めてください。「思い起こす」はギリシア語ではムネーモネウオーと言います。これは「思い出す、覚えていて、心に思う」の意味が第一にあります。そこから発展して「（思い出して）口にする、言及する」をも指します。そして教会はこの言葉に「想起する」、「記憶し続ける」の意味をも与えました。テモテが思い起こさなければならぬのはイエス・キリストのご生涯（しやうがい）であり、とりわけイエスさまの十字架の出来事でした。さらには復活（いっしょ）なされていつも一緒にいてくださるイエス・キリストというお方そのものについても思い起こさなければならぬのです。

福音朗読は重い皮膚病をわずらっていた10人が、清められた出来事とそのうちに1人だけがイエスさまのもとに戻ってきて神さまを賛美したという出来事のお話です。15節の「その中の一人は、自分がいやされたのを知って」の「知る」に注目しましょう。「知る」と訳された言葉はギリシア語ではエイドンです。もともと「見る」という意味があります。「見る」を表す単語は多くあります。プレポー、テオレオー、そしてエイドンなどです。「見る」という表現を巧みに使っているのは『ヨハネによる福音書』での復活の記述です(ヨハ20章1-9節参照)。それによればマリアが墓に行くと、石が取り除かれているのを「見ました」(プレポー)。そしてもう一人の弟子は亜麻布が置いてあるのを「見ました」(プレポー)。そこでペトロは墓に入って、頭に巻いてある布がぐるめてあるのを「見ました」(テオレオー)。もう一人の弟子も墓に入って、「見て」(エイドン)信じました。

プレポーにはごく普通の意味、つまり「身体的に見る」があるそうです。テオレオーには「じっくり時間をかけてじっくりと観察する」の意味があるそうです。そしてエイドンは「心の目で真理を洞察する」の意味だそうです。「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」は『ヨハネによる福音書』の一節です(16章16節)。「見なくなるが」はテオレオーが使われていますし、「見るようになる」はエイドンが使われています。ですから、肉体的な目ではイエスさまを見ることはもうないが、信仰の目では復活のイエスさまを見るようになるという意味になるでしょう。

今日の福音朗読の箇所に戻って、いやされた人は自分自身を「見た」(エイドン)です。皮膚病が治っているという事実を見ただけではなく、本当の自分自身を見たのです。その自分とは神さまとつながっている自分です。そして、皮膚病がいやされたという事実の向こう側にある神さまの手、神さまの働きを見たのです。だから、この人は神さまを賛美し始めたのです。

説教：イエスさまと始まる新しい賛美

福音箇所には明確に記されていませんが、重い皮膚病を患った10人の人々はおそらく共同生活をしていたと想像できます。あるいは互いに知りあいで、一緒に食べて、助けあって生きていたとも考えられます。共同体の生活をしていたのです。サマリア人はユダヤ人から馬鹿にされる存在でした。現代でもそうですが、ユダヤ人がサマリア地方を通ることはありません。しかし、この10人はサマリア人もユダヤ人も一緒にいた、住んでいたと想像されます。もともとの共同体から切り離された10人は肩を寄せあうように生きていたのです。彼らは律法の規定に従って、祭司のもとに行きます。しかし、外国人であるサマリア人だけは「神を賛美しながら戻って」(15節)来ました。イエスさまのもとへと戻り、「イエスの足もとにひれ伏して感謝」(16節)します。サマリア人はエルサレムの神殿とは異なる神殿での礼拝をゲリジム山で行っていました。しかし、いやされたサマリア人は神を賛美する場は神殿であるイエスさまの目の前だと「知る」ようになったのです。しかも、律法の規定によるユダヤ人の祭司の前で行う賛美ではなく、新しい祭司であるイエスの前で賛美をし始めるのです。今日の福音朗読はイエスによる新しい賛美についてわたしたちに教えてくれます。そして、第一朗読のナアマンのように「土」を運んで祭壇を築く必要はありません。むしろ、第二朗読で使徒パウロが命じているように「イエス・キリストのことを思い起こす」だけで十分なのです。